

Graeme Hugo, *Australia's Changing Population*

Oxford University Press, Melbourne and London, 1987, x + 354pp.

本書は、南オーストラリア州アデレート郊外のフリンドース大学社会科学部教授グレイム・ヒューゴーによってまとめられた、きわめて包括的かつ要領をえたオーストラリア人口の解説書である。1988年にイギリス人による植民開始200年を祝ったオーストラリアは、言うまでもなく移民国家であり、人口規模とその成長率、人口の人種構成、人口の地域的分布などは、オーストラリア史上一貫して政策形成上の重要課題であった。したがって、移民政策についても、その時々々の経済状況、人種観などから常にいろいろな議論が繰り広げられてきた。最近でも、実際にはまだ全人口に対してわずかの割合しか占めていない東南アジア人の移民について、流入制限を強めるかどうかの議論がマスコミを賑わしたばかりである。本書では、第4章「移民国家」において、最近のオーストラリアの移民政策と実際の移民動向がまとめられ、移民定着地の国内地域分布と労働力市場との関係が検討されている。また、移民論争についても簡潔な要約がなされているが、筆者の立場は必ずしも明確に述べられてはいない。

第8章では、「オーストラリアの人種のモザイク」と題して人種構成、各人種の世代構成・年齢構成・社会経済的な移動などを詳細に比較している。この章では、忘れられがちではあるが、それを避けてオーストラリアを語ることはできないオーストラリア原住民(Aborigine)人口についてもひとつの節を設けて論じている。その他の章でも、死亡率や出生率の関連で彼らについて若干言及してはいるものの、総体として軽く触れる程度の記述にとどまっていることはいなめない。オーストラリア原住民は、ヨーロッパ人が到達した時30万人ほどを数えたと推測されているが、その後のヨーロッパ人との軋轢の過程で1930年代には7万人以下に減少したものの、戦後の保護政策によって現在15万人強まで回復している。しかし、その死亡率の高さなどは第3世界の水準にとどまっており、その他の集団ときわめてかけ離れた人口状況を示しているのである。現在、人口の1%を占めるにすぎないわけではあるが、そのような格差が持続する要因などについて1章をさいても良かったのではないかと思われる。

多くの欧米諸国において、結婚にかわる同棲の普及、離婚の増大、それらの結果としての家族崩壊などが話題となっているが、オーストラリアにおいても同様の傾向が観察されている。第2章の「ベビーブームとベビーバスタ」では、出生力の移民集団による格差を検討し、中東からの移民の出生力が一番高いこと、イタリア、ギリシャなどの南ヨーロッパからの移民の出生力もオーストラリア生まれの者より若干高いことなどを示している。また、1970年以降のオーストラリアにおける出生率低下についても文献のレビューを行っており参考になる。家族構造の変化に関連して、第7章では、「家族の死?」と題して、結婚離婚動向、世帯構造の変動などが、移民集団別に細かく検討されている。また、第6章では、オーストラリアにおける高齢化問題が正面から論じられている。ここでは、今後増大する高齢者福祉需要に対して、公共的な投資だけでなく、家族をはじめとする私的な社会投資による介護の必要性が指摘されている。いかにもマイトシップを強調するオーストラリア的な発想である。

本書の特徴として、いろいろな人口現象の持つ政策的含意が論述に当たって常に意識されており、たとえば、移民集団による家族構造の差異と老人福祉政策、住宅政策の関係などが吟味されている。広大な土地と資源に恵まれたオーストラリアにとって、それらを活かして行くことができるかどうかは、移民政策を大きな柱とする人口政策に依存しているという熱意がひしひしと伝わってくるすぐれた解説書となっている。本書の主なデータは、1981年の国勢調査結果であり、1984年までの統計データによって国勢調査後の傾向を追跡している。その後、オーストラリアでは1986年に国勢調査が行われており、オーストラリア人口学界の長老、ポリー博士も指摘するように、著者によるその後の研究成果が期待される。(大谷憲司)